

『鼎録國朝史記事實類編評釋日記故事』解題

大澤 顯 浩

このほど学習院大学東洋文化研究所に新しく収蔵された
明刊本『鼎録國朝史記事實類編評釋日記故事』四巻は、豫
章樂莘逸士編、線装一冊。版式は上下二段、上段二十四行
五字、下段十行二十字、框高21.9cm（巻一卷首、写真1）で、
上段に語句の註釋があり、本文中には評点が付される。封
面は無く、目録の末尾には、「萬曆歲新月吉旦」、「禮部春
官纂」、「皇明日記 目録畢」とあり、江西出身の礼部
（おそらくは南京礼部）の官僚によって編纂され、万曆年
間に南京で版行されたらしい（写真2）。ただし、編者の
樂莘逸士とは現在のところ不詳。題名の通り、明末に盛行
した『日記故事』のバリエーションの一つということがで
きるだろう。

巻一の内題には『鼎録國朝史記事實類編評釋日記故事』
とあり、「豫章 樂莘逸士 編輯」「京陵 周氏 梓行」と
みえる。明末の南京の周氏は当時の版刻の業界では名の知
られた一族の一つといてよく、繆咏禾『明代出版史稿』
（江蘇人民出版社、二〇〇〇）や杜信宇『明代版刻綜録』
（江蘇広陵古籍刻印社、一九八三）、同『全明分省分県刻書



写真1 巻1巻首

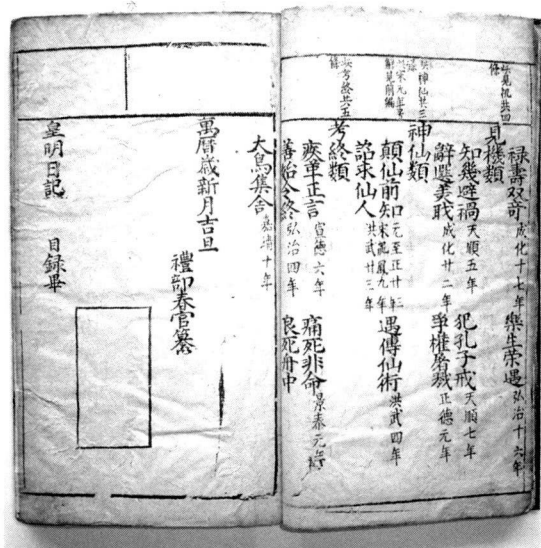


写真2 目録末

考』(線装書局、二〇〇一)などを見れば、いくつもの小説で知られる周曰校(万巻楼)や周近泉(大有堂)などといった名前がすぐに挙げられる。

巻一末尾には「皇明風教新書卷之一終」という記載があり、抄補された巻四の末尾は「鼎録國朝史記日記新書四巻畢」となっている。なお、巻二の内題は『鼎録國朝史記事實類編評釋日記』、巻四は『鼎録國朝史記事實類編評釋日記新書』となっているが、以上のような『國朝史記事實類編評釋日記故事』や『皇明日記新書』、『皇明風教新書』というような名は各種の書目類には見当たらない、明末ではいざ知らず今となつては貴重な一本である。

書自体にかなり傷みがあったのか装丁し直され、最初と最後の二葉は抄補されたもので、巻頭第一葉表の序文には斜めに大きな欠落がある。最初には「皇明日記新書序」という樂幸の一葉半の序(每行十六字)があり、その末尾に「故扁曰風教日記新書云」とある。次いで目録(十一葉)が置かれ、目録の次には婦人の寢室に病中の婦人と赤子を抱いた小間使いが描かれた半葉の挿図があり(写真3)、巻一の本文へと続く。あるいは、病中の婦人ではなく最初におかれた故事の太祖朱元璋の誕生の図なのかもしれない。各巻第一葉表と本文中の第十四葉表、第二十八葉表の計三ヶ処には半葉の精巧な挿図がおかれ、計十二図がある(写真4)。挿図の雰囲気は徽州の影響を受けているといってもよいかもしれない。全相本ではなく各巻の初めに繡像

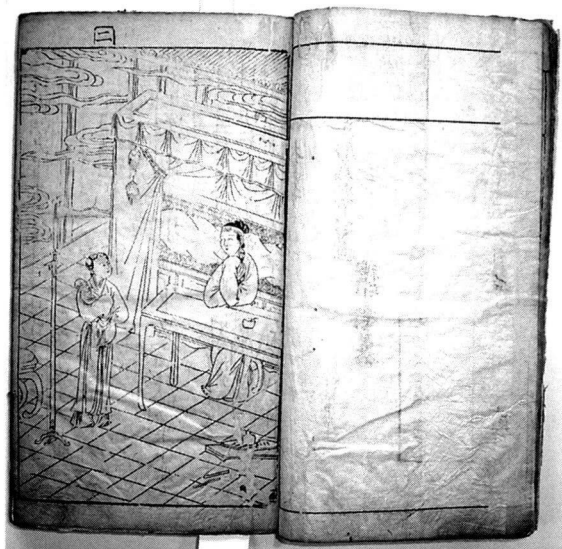


写真3 婦人図

を掲げるのは南京の刊本によくみられるが、これもその一つである。『日記故事』と称するものでは万曆新歳の木記のある劉龍田刊『新撰類解官様日記故事大全』七巻も、巻首の二十四孝の部分以外は、これと同じく全相本ではなく、巻頭に挿図を置く形式である。

巻頭の序は以下の通り、一部の文字は俗字を改め傍線を付した。

皇明日記新書序

皇上*****相弼諧于内
 *****声教化咸三登
 *****固難而保治尤難
 *****之日恒不忘教思無
 *****有道之長也先民有言
 *****其
 *****則思其民以是二者往來于胸
 中也不佞精神厝注尤欲效一得之愚持
 為當寧獻徐思之雖志三代之英未若當
 時見於行事之著明也不辟鄙陋採輯我
 明哲相賢宰施澤於當年貞女仁人遺芳
 於后世日累月積類編成書雖不敢曰標
 德蘊功之言少有裨于風教耳君子幸而
 懲勸于上小人幸而觀感于下而時雍風
 動之休爛然在目也然所謂者獨言在耳
 其人與骨皆已朽矣耐之何其持而則之



写真4 斥説仏老図 巻2第14葉表

詩云殷鑒不遠在夏后之世又云有寬德
行四國順之善乎孟氏云尚論古之人是
以論其世也猥為保治良規故扁曰風教
日記新書云

樂幸拝言

序畢

また、目録に記される各類目は以下のとおりで、故事の
数を各類の後に記すと次のようになる。

一卷 (69条)

- 生相 (9)、学知 (5)、孝親 (12)、敬長 (4)、立身 (10)、
- 齊家 (2)、忠臣 (17)
- 愛民 (10)

二卷 (81条)

- 尊賢 (7)、隆師 (2)、信友 (2)、仕宦 (4)、崇禮 (6)、
- 惇義 (6)、闢邪 (8)、逐奸 (9)、救正 (3)、遠色 (3)、
- 清廉 (18)、鯁介 (10)

三卷 (77条)

- 気節 (9)、奇才 (11)、雅量 (9)、威望 (14)、誠格 (4)、
- 媚悦 (15)、貪寵 (5)
- 媚嫉 (5)、内閣 (5)

四卷 (67条)

- 戡乱 (7)、奇異 (11)、感德 (8)、化物 (3)、貞烈 (6)、
- 婦隱 (9)、訓子 (3)
- 遭遇 (8)、見機 (4)、神仙 (3)、考終 (5)



写真5 目録 第一葉

本文中には記されないが、目録の標題には

生有聖瑞〔元大曆元年〕

というように年号が注記されていて（写真5）、目録に記された年号で見ると、概ね嘉靖年間までのもので、収められる故事のなかでは巻二、鯁介類「死賢于生」隆慶二年や巻四、貞烈類、「史氏刺面」万曆五年が最も遅いものといえる。また、巻一、忠臣類「罵賊死烈」（元至正二十年／宋龍鳳六年）、巻二、惇義類「興城存亡」（洪武卅五年／靖難建文四年）巻三、奇才類「王佐奇才」（洪武卅四年／即建文四年）、巻三、媚悅類「稱頌功德」（吳元年／元至正廿七年）巻四、奇異類「夢神救駕」（洪武三十五年／即建文四年）というように、龍鳳や建文の年号の表記がみられるのも特徴的であろう。

各類の故事は、処々時期が前後する例外もあるが、基本的には年代順に並べようとしたようにみうけられる。最初の生相類には九故事があるが、朱元璋の誕生時の奇瑞を記す「生有聖瑞」（元大曆元年）から明中期の「状元志量」（正徳三年）までの故事が年代順に並べられている。

写真でみると、本文中には小字の双行註が施される他、評点が増えられている。年号、人名には傍線が付され、地名は（福建晋江）というように括弧で示される。また、上段には「救時宰相考」、「御史考」、「范文正公考」や「乳虎什（釋）」、「九原釋」、「參註」、「集覽」といった出典や語句、音の注釈、「集評」、「參評」といった評言がおかれて



写真6 仕宦類 卷2第7葉表

いる。また俗字がよく用いられ、年号にも景泰を景太、嘉靖を加靖というような表記がみられる。以上からわかるように、全般的にみて本書は必ずしも教養のある読書人を対象にしたものではなかったといえる。

それでは、どのような読者を想定していたのかを、明末に数多く編纂された『日記故事』との関係において記しておこう。『日記故事』とは子部、類書類、彙考に分類されるもので、題名は「日々記憶すべき故事」とでもいうような意味である。元代に編纂された『小学日記故事』の後を受けた一種の啓蒙書で、故事の書は『君臣故事』など元明以来の全相本のものが数種残っている。なお、故事と称するもので古いものには、南宋嘉定五年序刊の楊次山「歴代故事」十二卷（『靜嘉堂文庫漢籍分類目録』史部、史鈔類）がある。

明中期には坊刻本が多く行われたようで、葉盛「水東日記」卷十二、日記故事に、

故事書、坊印本行世頗多、而善本甚鮮、惟建安虞韶『日記故事』以為一主楊文公、朱晦庵先生之遺意。

とあるように、当時『日記故事』という形は元代の建安の虞韶『小学日記故事』に始まると考えられていたようである。明代に読まれていた形跡を探ると、唐順之「荆川先生文集」卷15、盛孺人墓志銘には、蘇州太倉の人で嘉靖年間の顧存仁の妻盛氏が家庭内で読んでいたことを記している。



写真 7 立身類 卷 1 第 17 葉表

また、黄儒炳『統南雍志』卷三、隆慶三年正月乙丑の記事は、隆慶年間の授例監生について、ただ書物の暗誦と習字を教わって『孝順事実』や『日記故事』などを説明されただけであり、学問の向上を期待しても難しいといっている。いづれも具体的な読者の像として挙げられるのは知識階層の婦人や授例監生といったもので、いわば、さほど高級ではない平易な読み物とされていたようである。

それを裏書するかのように万曆以降には巻数が少なくなつた上図下文の形式(全相本)のものが盛行した。また巻頭に「二十四孝」を置いた版本も多くつくられ、ある種の童蒙書、幼学書として用いられたといえる。本号掲載の大澤顯浩「啓蒙と卒業のあいだ」にいうように、もともと童蒙の書に通じるものであった。さらに、明末には白話による読者層を想定した『新註便蒙演說日記故事』などというものも版刻されていた。十九世紀になると、嘉定の瞿中溶撰『二十四孝考』(台北、廣文書局影印、一九八一)道光十五年の序には、

世俗有坊刻『日記故事』一書、為鄉里塾師與蒙童講說者。前列「二十四孝」、始於虞舜、終於宋之黄山谷、必是南宋以後人所為。

とあり、巻首に「二十四孝」を載せた『日記故事』が、郷里の塾師が蒙童に講説するものであるとはっきり記すようになっていた。また、余治『得一録』(『官箴書集成』第八冊(黄山書社、一九九七)の記す清節堂におかれた義学

の規定（卷十三之三、「義学章程」塾中条例）に、

一、「日記故事」最為啓蒙善本、務須毎日講説一、二条、使之覆講。近時又有『学堂日記』、『学堂講語』等書。皆孝子悌弟善惡果報故事、均宜日與講解、俾知修身佩服。

とあるように清末の義学でも読まれ、『学堂日記』というバリエーションも作られている。『宝卷』初集第三十九冊（山西人民出版社、一九九四）に、『学堂日記故事図説』一卷（光緒二十七年刊本景印本）が収められるが、同治七年序のある清末の編纂で上文下図の主に明清の故事を記したものである。

現在知られる虞韶『小学日記故事』には以下の版本があり、

- (a) 『新刊大字分類校正日記大全』存九卷、全相本、虞韶纂集、熊大木校註、嘉靖二十一年序、蓮台木記「壬寅年重加校／正整新刊梓行」（『中国古代版画叢刊』2、上海古籍出版社、一九八八）
- (b) 『新增圖像小學日記大全』十卷、全相本、虞韶纂集、管昉増校、嘉靖丙寅朝鮮刊本、卷末木記「勤有書堂新刊」蓮台木記「四字堂錦溪刊」（名古屋 蓬左文庫蔵）
- (a)(b)については、橋本草子『日記故事』の版本について『人文論叢』46、一九九八）に詳細な検討が加えられている。その他、「日記故事」という題目を掲げるものに
- (c) 『日記故事』二卷、嘉靖四十五年丙寅朱天球序、（台

北 國家圖書館蔵

がある。(c)は無図で、八行二十字、四周单边白口单魚尾のもの。『小学日記故事』の歴耕老農「日記故事序」が、最初に置かれている。朱天球は福建漳浦の人で嘉靖二十九年進士、その巻末の「刻日記故事序」によると山東で社学を興し『小学』と『日記故事』を頒布したとある。以上はいずれも嘉靖年間のものであるが、現存する『日記故事』という呼び方をするものの中では最も古いものである。葉盛『水東日記』でふれられていたのは、おそらくこのようなものではなかったかと推測される。

他に、図集の写真でしか確認できないが、万曆に入ってから鳳陽で刊刻されたものがある。

- (d) 『日記故事』二冊、万曆七年（一五七九）臨濠書舎刊本

この版本の書影は周蕪『徽派版画史論集』（安徽美術出版社、一九八五）や張国標『徽派版画芸術』（安徽美術出版社、一九九六）などにみられる。周蕪の解説によれば巻下一冊のみを存する安徽省圖書館所蔵の全相本（上図下文本）であるが、文だけの箇所もあるらしい。廉潔とある清恐人知（晋胡威）、飲泉不貪（晋呉隱之）、独以官貧（唐房彦謙）の条の図版の他に、巻末の魁星を描いた書影があげられ、蓮台木記に「萬曆己卯秋／臨濠書舎刻」とあり、末尾に「日記故事卷之下」とみえている。

その後、万曆以降になると、福建や徽州での刊本が多く

残っており、橋本氏の前掲論文にもあげられている。『便覧聯輝日記故事』三卷（内閣文庫三六七―七七二）や『初類日記故事』（東京大学東洋文化研究所）、『便覧興賢日記故事』四卷、万曆三十九年刊（内閣文庫三六七―七七三）というような角書が加わったものが多く出版されるようになり、『詩選』系二十四孝の二孝子田眞、張孝張禮を仲由、江革に改変した所謂『日記故事』系「二十四孝」を巻首に掲げるものが現れる。

それらの中で年代がはっきりする最も早いものは、内閣文庫所蔵の万曆三十九年刊『新鐫徽郡原板校正繪像註釋便覧興賢日記故事』四卷（内閣文庫三六七―七七三）である。

これらは所蔵からも分かるように日本にも多くもたらされ、和刻本も江戸時代から明治初期に至るまで各種出版された。基本的な内容は虞韶の『小学日記故事』をもとに節略したものといえるが、明末の万曆三十二年重刊『重刻聯對便蒙圖像七賢故事大全』二十卷（東京大学東洋文化研究所蔵）などのように、『日記故事』とは称さないが、新しく故事を編纂し直したものも存在する。

この『鼎鏡國朝史記事實類編評釋日記故事』四巻も上述のような万曆時期の『日記故事』の再編纂の動きと並行して、虞韶以来の『日記故事』の体裁を借りて、万曆初までの本朝（明朝）の故事を分類収録し、教化に役立てようとした一種の啓蒙書と解してよいだろう。

註

- (1) 長澤規矩也「元明編刊の故事集について」、『長澤規矩也著作集』第三卷、汲古書院、一九八三、原載『書誌学』一六一―一、一九四一。
- (2) 詹家豪「明代大学中的援例監生」、『広東社会科学』二〇〇一―一六。所引『続南雍志』卷三、隆慶三年正月乙丑。
- (3) フランス国立図書館所蔵『新增註釈演說二十四孝故事』五卷 (Chinois: 3287)、巻一の題には「新註便蒙演說日記故事」とある。